需要全本请访问 www.ertongbook.com

悪魔のいる文学史

神秘家と狂詩人

澁澤龍彦

中央公論社

悪魔のいる文学史　　© 1972　検印廃止　　定価 950 円
昭和47年10月15日 初版印刷　　昭和47年10月25日 初版発行
著者　澁澤龍彦　　発行者　山越 豊　　印刷所　三陽社

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2丁目1番地　電話(03)(561)5921(代)

1972年

中央公論社刊

需要全本请访问 www.ertongbook.com

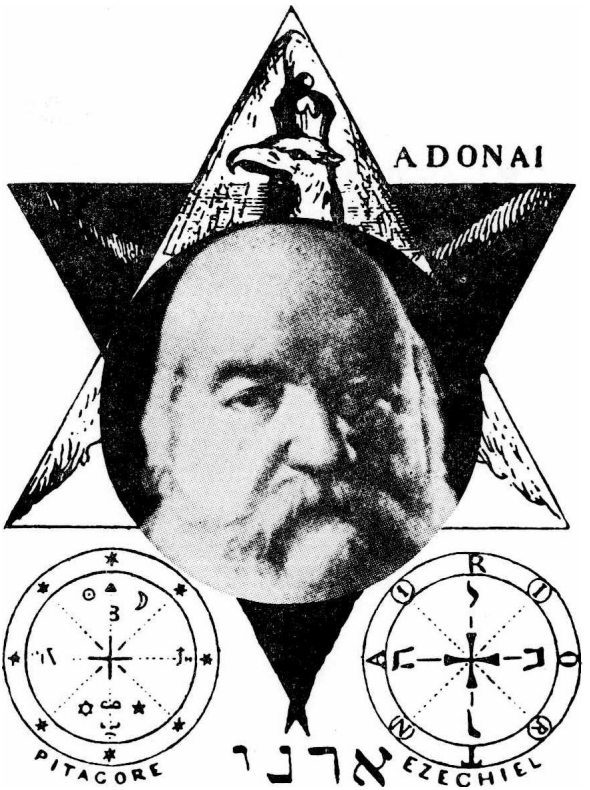
悪魔のいる文学史　目次

エリファス・レヴィ……神秘思想と社会変革　七
グザヴィエ・フォルヌレ……黒いユーモア　三三
ペトリュス・ボレル……叛逆の狂詩人　五九
ピエール・フランソワ・ラスネール……殺人と文学　七九
小ロマン派群像……挫折した詩人たち　九九
エルヴェ・ド・サン・ドニ侯爵……夢の実験家　一三五
シャルル・クロス……詩と発明　一五一

ジョゼファン・ペラダンと
スタニスラス・ド・ガイタ侯爵……世紀末の薔薇十字団運動　一八三
モンフォコン・ド・ヴィラール……精霊と人間の交渉について　二三三
シニストラリ・ダメノ……男性および女性の夢魔について　二四三
サド侯爵……その生涯の最後の恋　二五五
ザッヘル・マゾッホ……あるエピソード　二六九
アンドレ・ブルトン……シュルレアリスムと錬金術の伝統　二八五
あとがき　三〇三

エリファス・レヴィ

——神秘思想と社会変革



エリファス・レヴィの肖像.

目に見える言語で形づくられた
この世は神の夢だ。
神の言葉は、この世のもろもろの象徴をえらび、
聖靈は、この世を神の火で満たしたのだ。
愛の、栄光の、はたまた恐怖の
この生きた書物を
イエスが我らのためにふたたび見出し給うた。
それというのも、あらゆる秘密の学問は
エホバの聖なる名前から
発した文字にほかならないからだ。

自然の法則を解し得る者にとって、
自然の一切は決して沈黙してはいない。
星々には文字があり、
野の花々には声がある。
闇夜に輝やく言葉、

需要全本请访问 www.ertongbook.com

数のように厳正な語句、
すべての音が一つの反響（こだま）でしかない声、
かつて祭司たちの叫び声が
エリコの城壁を震動させたように
ありとあらゆるものを動かす声。

右に翻訳して引用したのは、エリファス・レヴィの「コレスポンダンス」と題された詩の一部（十行詩十節のうちの第四節と第八節）である。すでにジャック・クレペとジョルジュ・ブランの詳細な『悪の華』の批評版にも指摘されているように、このレヴィの詩は、のちに象徴主義の理論の基礎となった、あの名高いボードレールのソネット「万物照応（コレスポンダンス）」に直接の影響をあたえた、いわば先駆的な作品ということになっている。

フランスのロマンティシズムは、ようやく最近にいたって、いくつかの重大な修正を受けつつあるようである。ハイネの嘲笑的な言葉がそれを示しているように、長いあいだ、フランス十九世紀初頭のロマン主義の運動は、ドイツ・ロマン主義の皮相な猿真似と解せられ、古典主義的クラルテを重んずるフランス文学の伝統的な体質には、曖昧な神秘や幻想の入りこむ余地はないと信じられてきたのであった。この通念をひっくり返したのがオーギュスト・ヴィアット、アルベール・ベガン、レオン・セリエ、ピエール・カステックス、あるいはドイツのエルンスト・ロベルト・クルティウスなどの批評家であって、彼らの見解によると、一般的にはレアリストと見られていたバルザックは幻視家、センティメンタルなラマルティーヌは調和の詩人、貴族主義者ヴィニーは新プラトン派的な哲学者、そして豪傑趣味のゴーティエは不安の精神の体現者ということにもなるのである。またネルヴァルの

評価が急激に高まるにつれて、彼とともに生き、彼とともに挫折した、いわゆる「小ロマン派」に属する群小文学者にも照明が当てられるようになってきたことも、ここで忘れずに述べておかねばならぬであろう。

「小ロマン派」とは何か。それは叛逆と挫折の世代である。一八三〇年（「エルナニ」事件と七月革命の年）の世代と呼ばれる彼らは、大革命後の社会の反動化を身をもって経験した、いわば不安と絶望の世代であって、彼らのメランコリーや想像力は、政治的理想の挫折によって惹き起された幻滅やら、宗教的信仰の危機から生じた虚無感やら、ブルジョワの金銭万能主義に対する嫌悪やらのうちに、いよいよ鋭く研ぎすまされたのである。むろん、大部分の作家たち、ユゴー、サント・ブーヴ、ヴィニー、デュマ、バルザックらは、やがて体制に順応し、制作によって絶望感を克服し、時代の悪徳を冷静に見つめながら、芸術家としての自己を完成させる道を選ぶことになるのであるが、ここでとくに注目しなければならないのは、これらの正統ロマン派たち、あるいは大ロマン派たちの周辺に、自由なボヘミアン生活を送りながら、最も極端な「芸術のための芸術」を叫び、政治的にはかなり急進的な立場をとりつつ、しかもブルジョワ進歩主義者の俗物主義を嫌悪排撃し、あらゆる既成の権威に「否（ノン）！」をたたきつけた、いわばロマン派の傍系ともいうべき、スキャンダルを好む少数の過激な青年たちの一群がいたということである。これが「小ロマン派」だ。

要するに彼らは、世紀末の「呪われた詩人」や二十世紀のシュルレアリストの遠い先輩格に当っていたわけで、価値の転倒した大革命後の社会と人間の矛盾に最も深く魂を傷つけられた、喪失の世代の代表だったわけである。深刻なペシミズムと、ブルジョワの俗物主義に結びついた楽天的な進歩の思想に対する、抜きがたい侮蔑とから、彼らはことさら現実から目をそむけ、陰惨な恐怖にみちた反社会的な幻想や、古代の輝かしいデカダンスの夢や、さては人間の力の及ばぬ神秘や驚異の超絶的な

世界に、みずからの想像力を解き放ち、酔い痴れたのであって、その異様な美にみちた毒花のごとき幻想の根柢には、必ずしも現実逃避という単純な言葉だけでは片づけられない、複雑な心理の屈折があったことを忘れてはなるまい。彼ら過激派のほとんど大部分は、この現実嫌悪の必然的な成行きから、第二帝政成立の前後に、狂気したり自殺したり、あるいは文学的落伍者となったりして、失意と不遇のうちに姿を消してしまうのであるが、これも純粋なロマンティシズムにつきまとう必然の悲劇であり、宿命であったと言えるかもしれない。

ロマン主義の運動とは、もともと論理に対して非合理なものを、知性に対して無意識的なものを、歴史に対して神話もしくは伝説を、日常的現実に対して夢を、昼に対して夜を、それぞれ称揚する精神の運動にほかならなかったが、彼ら少数の過激派によって、この傾向はさらに幻想的、怪奇的、反社会的、無政府主義的、ユートピア的、神秘主義的、秘教的な方向にまで助長されたのである。この「小ロマン派」のなかに、シャルル・ノディエ、ジェラール・ド・ネルヴァル、テオフィル・ゴーティエをはじめとして、ペトリュス・ボレル、グザヴィエ・フォルヌレ、フィロテ・オネディ、アルフォンス・ラップ、シャルル・ラッサイー、ピエール・シモン・バランシュ、フィラレート・シャール、アルフォンス・エスキロス、ジュール・ルフェーヴル・ドゥーミエ、ロジェ・ド・ボーヴォワール、ジャン・ポロニウス、アルフォンス・ロワイエなどの、一般にはあまり名前の知られていない、しかしながら一癖も二癖もある奇矯な文学者の面々がおり、私はこの論稿のなかで、今後何回かにわたって、彼らのなかの幾人かを紹介してゆくつもりなのである。そして最初に私が「コレスポンダンス」の詩を引用したエリファス・レヴィも、一時期、たしかにこのグループの周辺に属していた風変りな人物なのであった。

エリファス・レヴィは従来、その生涯の後半期に書いた『高等魔術の教理および儀式』二巻によっ

て、ユゴー、ボードレール、ランボー、リラダン、マラルメ、イエイツ、ジャリなどの象徴派詩人から、さらにジョイス、ヘンリー・ミラー、アンドレ・ブルトンなどの現代作家にまで絶大な影響をあたえた、十九世紀最大の隠秘学者（オカルティスト）として知られていた人物であるが、最近のボードレール学者たちの研究では、その独特なコレスポンダンスの理論によって『悪の華』の詩人に詩的霊感の源泉を提供した、小ロマン派中の異彩としても見直されるようになってきている。

ボードレールが『悪の華』の有名なソネットを書くに当って、その主題や内容を多くの先人たち、たとえばフーリエ、スウェーデンボルグ、ネルヴァル、ラヴァーテル、サン・マルタン、レティフ・ド・ラ・ブルトンヌたちから借用したらしいということは、現在では半ば文学史の常識となっている。むろん、それによってボードレールの作品の価値が減ずるということはあり得ないだろう。ところで、一九三五年にジャック・クレペが偶然に発見したという、一八四四年当時ボードレールが寄稿していた無署名共同執筆のゴシップ専門小冊子『パリ劇壇艶話』には、ボードレール自身の筆によると思われる、暗にエリファス・レヴィを諷した噂話や皮肉な戯文が多く載っていて、ボードレールがその頃、すでにレヴィを知っていたにちがいないことが証明されているのだ。のみならず、同じ題名の「コレスポンダンス」以外にも、『悪の華』のなかの数篇（たとえば「あまりにも陽気な女に」「午後の唄」「高翔」など）に、明らかにレヴィの詩と同じ調子のものを見出すことができるとクレペは指摘している。どうやら詩人はレヴィの着想をちゃっかり頂戴していたらしいのだ。

のちにボードレールが『高等魔術の教理および儀式』（一八五六年）を読んでいたのは確実で、たとえば一八五九年のプーレ・マラシ宛ての手紙には、「あなたの二つの拳固に磁気流体を満たし、それで交互に力いっぱい背中と太陽叢をたたきなさい。それは呪いの一種と見なされるはずです。『高等魔術の儀式』によれば、強い意志をもってする呪いはきっと成功するのです」とある。ボードレールが

晩年、いかに魔術や隠秘学に凝っていたかについては、ジョルジュ・ブランの興味ぶかい研究（『ボードレールのサディズム』一九四八年）がある。

前にも述べたが、ロマン派や象徴派の詩人たちがいずれもレヴィの影響を受けていたのは驚くべきほどで、たとえばオーギュスト・ヴィアットによれば、ユゴーの『サタンの終り』（一八八六年）には明らかにレヴィの『自由の誓約』（一八四八年）の反映が認められるという（『ヴィクトル・ユゴーとその時代の幻想家たち』一九四三年）。またヴィリエ・ド・リラダンは一八六六年九月十一日付の手紙で、マラルメに『高等魔術の教理および儀式』を読むことをすすめている。そのためか、マラルメは隠秘学によって決定的な影響を受けた模様で、のちのヴィクトル・エミール・ミシュレ宛ての手紙には、彼から『芸術における秘教』（一八九〇年）を贈られたことを感謝している（シャルル・シャッセ『マラルメの鍵』一九五四年）。ついでに述べておけば、ヘンリー・ミラーは『わが人生の読書』（一九五二年）のなかに、レヴィの『魔術の歴史』をたびたび引用している。

エリファス・レヴィというユダヤ風の名前は、魔術師として転生してからの晩年の彼の筆名であって、若い頃の彼の本名はアルフォンス・ルイ・コンスタンである。アルフォンス・ルイをヘブライ語に翻訳すればエリファス・レヴィとなる。もしクレペの言う通り、コンスタンが当時の「最も珍奇にして典型的な人物の一人」であったとするならば、今後、文学史の領域で、この人物がもっともっと研究されなければならないのは申すまでもあるまい。単にボードレールとの関連からのみならず、また一八三〇年代から一八四〇年代へかけての、当時のロマン主義的精神風土の底流を知る上にも、この人物ほど貴重な資料を提供してくれる人物は少ないかもしれないのだ。それというのが、彼は七月王制に裏切られた小ロマン派の心にわだかまっていた、夢や希望や怨恨やユートピア願望や、神秘主義的衝動や終末思想や社会主義への接近や、その他ありとあらゆるものを一身に兼ね備えていた、ま

ことに複雑きわまる人物だったからである。

私には、コンスタンの「コレスポンダンス」（それは『三つの調和』と題された、一八四五年刊行の詩集に含まれている）が、それほどボードレールの詩によく似ているとも思われない。芸術的見地から見て、後者の方がはるかにすぐれているのは論を俟たぬであろう。なるほど、象徴だとか、自然の語る言葉だとかいった、精神界と物質界とのアナロジーに関する表現があることはある。しかし後者の洗練された感覚的表現にくらべて、前者のそれは、あまりにも観念的、宗教哲学的であり、情緒的なふくらみに乏しいのである。詩形やレトリックの美しさにいたっては、両者のあいだに大きな隔りがあることを認めないわけには行くまい。調和もアナロジーも、すでに彼の先輩フーリエのユートピア哲学にある観念で、エリファス・レヴィがフーリエの影響を受けていたことは確実と見られるが、それがいつのことかは明らかにされていない。

フーリエにしても、ネルヴァルにしても、レヴィにしても、またのちにふれる予定であるが、奇怪なエヴァディスム（エヴァとアダムとを合成した語）なる新宗教を興したガンノーなる人物にしても、彼らが多かれ少なかれ、終末思想とユートピア的夢想と、また女性崇拝の共産主義的思想をいだいていたということは、私にはきわめて意味ぶかいことのように思われる。クルティウスによれば、「メシア思想と黙示とに沸きたつ時期には、生気のない象徴的形姿が新らしい生命に満たされることがある、ちょうど血を吸った亡霊のように。このような時期をフランスは七月革命の前後に体験した」（『ヨーロッパ文学とラテン中世』一九五四年）と。一八三〇年代の裏切られた青年層の心には、裏切られたとはいえ、おそらく現代の私たちよりはるかにもっと、歴史への信頼と未来への希望と、それに伴なう豊かな詩的感覚的ヴィジョンとが、なお余燼のように燃え残っていたのであろう。神秘主義的社会主義者たることは、ほとんどロマン主義者たることと同義であったのではないか、とさえ思われるほど

需要全本请访问 www.ertongbook.com